

日本語教師のキャリア・パス形成

中 川 良 雄

はじめに

日本国内外で活躍する日本語教師の多くは、当初から日本語教育に明確なイメージを有していたわけではなく、キャリアの形成につれて、明確なビジョンを持ち始めたり、目指すべき方法論を確立していったりする。また大学卒業後に、いったんは他に職を得たものの、日本語教師への魅力からか、転職するケースも稀ではない。

どのような道筋を経て、日本語教師の職を得たのか。またどのような修練を経て、現在の職業観を形成していったのか。

キャリア形成への道筋を「キャリア・パス」と呼びたい。

キャリア・パスとは、次のごとく、一般的には企業が社員のキャリア・アップのため制度として設けていることが多い。

キャリアパスとは、職歴を意味する「キャリア」と道筋を意味する「パス」を組み合わせた言葉です。一般的には、企業内で社員が目標とするポストや職務に就くために必要な業務経験やルートといった道筋が、キャリアパスです。また、その道筋を社員に対して明確に示したものを、キャリアパス制度と言います。

企業がキャリアパスを制度として明確化することで、社員に目的意識を持たせ、モチベーションを高く保つ効果が期待できるため、導入する企業が増えています¹。

日本語教育の場合、一般企業のような、キャリア・アップを目的とした研修制度は設けられていない。教師自らが積極的に研鑽を重ね、キャリア・アップを目指していくのが通例である。

日本語教師のキャリア・アップとキャリア・パス形成の手法を知ることは、

日本語教員養成に役立つばかりか、現職日本語教師のモチベーション・アップにもつながる。

本稿では、本論での調査と並行して実施した、インタビュー調査から抽出された概念をアンケート調査として項目化し、調査結果の客観化を試みる。

1 日本語教師のキャリア・パス形成に関する知見

1.1 教師の成長（飯野 2017）

飯野（2017）は、日本語教師へのインタビューから、教育実践の立場に変化のあった教師のライフストーリーを分析・考察し、変化をもたらしたのは、次のような要因であったと述べた。

教師たちは、異なる教育実践の立場に接することで、自分の教育実践の立場を意識化し、それをもとに他者と相互作用・対話をする。それが教育実践のアイデンティティの交渉であり、それは、自他の教育実践の背後にある学習観、教育実践の目的、参加者の関係性から、自他の教育実践の立場の理解を深め、さらに学習者や実践関係者との相互作用から教育実践の立場を検討し、それにもとづく教育実践を設計していくということである。（中略）重要なのは、教師が教育実践のアイデンティティを意識化し、他者と交渉し、それをもとに日本語教育コミュニティと自らの関係も意識化し、日本語教師としてのアイデンティティを交渉していくことである。その結果、教師が、日本語教育コミュニティへの非同化や周辺的なアイデンティティとの交渉が始まる。教師たちは、自らの教育実践のアイデンティティをもとに、日本語教育コミュニティを交渉し、日本語教育コミュニティとの多様な関係性を形成し、維持し、また変容させていた。

つまり飯野（2017）は、機関（コミュニティ）や同僚教師との関わりが日本語教師としてのアイデンティティを深め、成長につながると考えた。

1.2 日本語教師のキャリア・パス形成に関するインタビュー調査（中川、印刷中）

中川（印刷中）は、現職日本語教師へのインタビューから、インタビュー・データをM-GTAを用いて分析し、下表のような概念を抽出した。

この調査から、日本語教師のキャリア・パス形成に欠かすことのできないものは、同僚教師との関り（授業連携、授業連絡、役割分担）や学習者との関り（コーディネイター、ファシリテーター、クラス運営）などで、日々のたゆまぬ努力が人間の成長につながることを明らかにした。

表1 カテゴリー・概念・定義 (中川 印刷中)

カテゴリー	概念	定義
第一段階 憧憬期	①媒介語	媒介語を使って日本語を教える。
	②学習者イメージ	学習者は、欧米人が多いと思っていた。
第二段階 萌芽期	③直接法	日本語だけでも教えられる。
	④資格	だれでも教えられると思っていた。
	⑤日本語教育実習	日本語教育実習で初めて学習者と接する。
第三段階 実践期	⑥授業連携	ネイティブ教員とノンネイティブ教員との授業連携が必要である。
	⑦チームティーチング	日本人ネイティブ教師としての役割がある。
	⑧ネイティブ性	ネイティブ教師として果たさなければならない役割がある。
	⑨日本語教育の多様性	日本国内の日本語教育は多様化している。
	⑩過去の経験	過去の経験が日本語教育に活かされる。
	⑪大学院での学び	大学院での学びが現場に活かせる。
第四段階 成長期	⑫ゆとり	目先の授業だけにとらわれなくて、コース全体に気を配る。
	⑬授業目標	一日の授業目標は、「何かができるようになる」ことである。
	⑭コーディネイター	コーディネイターとしての役割の重要性に気づく。
	⑮人間性の成長	他者配慮の姿勢が生まれた

日本語教育の他分野とは異なる特徴は、多様化にあり、毎学期異なる学習者に接することや機関を変えれば、ニーズの異なる学習者や国が変われば、価値観や教育観の異なる教師と議論を交わすことで、キャリア・パス形成が促されたと考えた。

2 アンケート調査

2.1 調査時期

2023年7月～8月。

2.2 調査方法

Webアンケートを採用した。

2.3 アンケート項目の策定

中川 (印刷中、上記) で抽出された概念を項目化して問うた。

2.4 調査協力者（対象者）

日本人（ネイティブ）日本語教師を対象に、まずは属性（フェイス）を問うた。

①日本人（ネイティブ）日本語教師ですか。

はい、日本人（ネイティブ）日本語教師です。	38
いいえ、日本人（ネイティブ）日本語教師ではありません。	2

調査協力者は、40名であったが、「日本人（ネイティブ）日本語教師ではない」と回答した者が2名いたため、以下では38名を調査対象とする（「日本人（ネイティブ）日本人教師ではない」を選択した場合、以降の質問には進めなくなっている）。

②男／女

男	4	女	34	無回答	0
---	---	---	----	-----	---

③年齢

20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	無回答
5	10	13	9	1	0

④日本語教育歴

0～3年	4～10年	11～20年	21～30年	30年以上	無回答
3	8	21	5	1	0

⑤どこで日本語教育について学びましたか（複数回答有）。

大学院	大学学部 (主専攻・副専攻)	日本語教師養成 講座（420時間）	日本語教育能力 検定試験合格
20	14	16	11
独学	その他	無回答	
12	0	0	

⑥現在、どこで日本語を教えていますか。

日本国内の大学	10	海外の大学	9
日本国内の高校・中学校・小学校	0	海外の高校・中学校・小学校	0
日本国内の日本語教育機関	8	海外の日本語教育機関	7
日本国内のボランティア機関	1	海外のボランティア機関	0
日本国内のその他機関	0	海外のその他機関	1
無回答			0

⑦上記⑥の身分を教えてください。

専任教員	准専任教員	非常勤教員	ボランティア 教員	無回答
18	1	18	0	1

2.5 調査結果

⑧日本語教育を学ぼうと思ったきっかけは何ですか。(複数回答有)

国際的な仕事だから。	24
英語や中国語などの言語に興味があるから。	20
高収入につながると思ったから。	0
外国人の友達がいるから。	5
私でも簡単に教えられると思ったから。	0
無回答	3

⑨日本語教育について学び始める前、学習者は、どこの国の人が多いかと思っていましたか。(複数回答有)

中国や韓国などの東アジアの学習者が多いと思っていた。	23
アメリカやヨーロッパなどの欧米人が多いと思っていた。	9
ブラジルやペルーなどの中南米の人が多いと思っていた。	0
タイやベトナムなどの東南アジアの人が多いと思っていた。	8
学習者については、全くイメージがなかった。	0
無記入	1

- ⑩日本語教育について学び始める前、日本語教育にどんなイメージを抱いていましたか。(複数回答有)

英語や中国語などの媒介語を使って教えると思っていた。	23
日本語を使って、直接教えると思っていた。	6
だれでも簡単に日本語が教えられると思っていた。	6
日本語を教えるには、相当な知識と訓練が必要だと思っていた。	17
国語教育と同じようにやればよいと思っていた。	3
国際的な仕事で、高収入が得られると思っていた。	0
無回答	1

- ⑪現在、どんな科目を担当していますか。(複数回答有)

総合日本語	会話	文法	作文	聴解
31	8	16	11	11
読解	文字・漢字	日本文化 (日本事情)	その他	無回答
14	20	9	8	0

- ⑫日本語を教え始めて、上記の学習者に対するイメージは変化しましたか。

大いに变化した。	17
少し变化した。	12
あまり变化しなかった。	9
全く变化しなかった。	0
無回答	0

- ⑬ふだん心がけている、日本語教育上の指導はどんなことですか。(複数回答有)

発音・文法上の正確さ重視	13
コミュニケーション重視	33
タスク中心	18
無回答	1

⑭同僚の先生と授業連携をしていますか。(複数回答可)

授業の引き継ぎ連絡をしている。	29
ひとつのクラスを複数の教師と分け持っている(チームティーチング)。	10
非日本人(ノンネイティブ)教員と役割分担をしている。	15
授業連携をしていない。	4
無回答	1

⑮ネイティブ日本語教師であることを自覚するのは、どんな時ですか。(複数回答有)

正しい発音やアクセントで話せる。	22
文法的に正確な日本語が使える。	27
日本の社会・文化・歴史についての知識がある。	33
日本人のものの見方や考え方を体得している。	6
国際感覚を身に付けている。	0
無回答	0

⑯これまでに日本語教育の「多様性」を感じたことがありますか。それはどんなものですか。(複数回答有)

国籍、年齢の多様性を感じる。	28
学習目的、ニーズの多様性を感じる。	30
日本語教師、日本語教育機関の多様性を感じる。	17
多様性を感じることはない。	1
無回答	0

- ⑰これまでの社会経験や人生経験が、日本語教育に活かされたと感じることはありませんか。(複数回答有)

日本語教師になる前の職業経験が活かされた。	20
外国語学習経験が活かされた。	32
海外での生活経験が活かされた	30
活かされたと感じたことはない。	0
無回答	0

- ⑱大学院での学びは、あなたにとって有益でしたか。(大学院進学者のみ回答)

とても有益だった。	20	21
少しは有益であった。	2	3
あまり有益ではなかった。	0	0
全く有益ではなかった。	0	0

- ⑲大学院に進学する予定はありますか。(大学院未進学者のみ回答)

いずれ進学したいと考えている。	3
大学院に進学する予定はない。	12

- ⑳次の業務に取り組んでいますか。(複数回答有)

担任業務	17
学習者への進学・就職指導	13
人生相談	10
クラスのコーディネイト	18
クラブ・サークル活動指導	4
生活相談・生活指導	9
無回答	8

⑳日本語教育に携わることで、どんな人間的成長があったと感じますか。(複数回答有)

自身の日本語に気をつかうようになった。	30
差別や偏見のないものの見方ができるようになった。	30
国際貢献や国際平和について、考えるようになった。	20
自身の未熟さや経験のなさを、今後補っていきたいと感じた。	31
無回答	0

㉑今後どのように日本語教師という職業と関わっていきたいですか。

ライフワークとして、生涯続けていきたい。	36
他に適当な職業が見つければ、転職したい。	1
趣味・娯楽程度に関わっていきたい。	1
無回答	0

2.6 アンケート結果の分析

上記アンケート結果から、日本語教師のキャリア・パス形成のための履歴を考えてみる。

(1) 年齢と日本語教師歴

③で問うた「年齢」と④で問うた「日本語教育経験」の関係を見る。

年齢が若いと教育経験が浅く、年齢が高くなると、教育経験が増すことは一般的である。今回④「教育経験」で最も回答の多かった「11年～20年」では、「30歳代」の回答は6名、「40歳代」は12名、「50歳代」では3名の回答があった。つまり大学卒業後等に、いったんは他の職業に就き、転職したり、日本語

表2 年齢と日本語教育経験

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上
0～3年	3	0	0	0	0
4～10年	2	4	1	1	0
11～20年	0	6	12	3	0
21～30年	0	0	0	4	1
31年以上	0	0	0	1	

教育について新たに学んだりした者が少なからずいることを示している。転機は、30歳代～40歳代に訪れそうである。

(2) どこで日本語教育について学んだか。

⑤で問うた「どこで日本語教育について学びましたか」については、多様な履歴がある。

- A 大学学部（主専攻・副専攻）＋大学院
- B 日本語教師養成講座（420時間）＋大学院
- C 日本語教育能力検定試験＋大学院
- D 大学学部（主専攻・副専攻）
- E 日本語教師養成講座（420時間）
- F 日本語教育能力検定試験

どのコースを経れば、どんな機関での職が得られるとは一概に言えないが、日本国内国外を問わず大学での職（多くは当面非常勤）を得ることは大学院を修了していなければ叶わないであろう。日本語教育機関でも、大学院を修了していると、専任職を得るのに有利になる。

2024年4月以降、「登録日本語教師」が制度化されると、大学院や学部の課程、または養成講座で実習を経験していなければ、採用されなくなる。

いずれにしろ検定試験に合格しなければならなかったり、大学院の課程を修了しなければならなかったりと、望む職を得るには、長き道を歩まなければならない。

表3 大学院修了の有無と就職先

	大学院修了	大学院未進学
国内の大学	9	1
国内の日本語教育機関	3	6
国内のその他の機関	1	0
海外の大学	4	5
海外の日本語教育機関	2	5
海外のその他の機関	1	2

大学院での学びは、現職教員にインタビューした中川（印刷中）でも、「有益であった」との声が多く、また今回のアンケート調査（⑱）でも、「とても有益であった／少しは有益であった」という回答が多かった。大学院での学び

が教師のステップアップにつながり、今後への貴重な示唆の得られる場となることは、言うまでもない。

一方で、大学院未進学者に問うた⑩では、「大学院に進学する考えはない」が圧倒的に多い。その回答者の現在の身分は、

専任教員	10	非常勤教員	8
------	----	-------	---

と、専任教員が多く、すでに現職に満足、あるいはある程度は満足しているものと思われる（回答制限を設けていないため、回答者数は、「大学院未進学者」の数と一致しない）。

(3) 授業連絡と授業連携

上の「⑭同僚の先生と授業連携をしていますか」に対して、「授業の引き継ぎ連絡をしている」「ひとつのクラスを複数の教師と分け持っている」の回答が多かったことは、日本語教育の特徴を如実に表したものとして好ましい。「総合日本語」担当者には、「引き継ぎ連絡」は、必須の任務となる。

非日本人（ノンネイティブ）教師と「役割分担をしている」と回答したのは13名で、中川（2018, 2019 a, 2019 b, 2019 c, 2020, 2021, 2022）、中川・王（2018）では、「優れた日本語授業」創出のためには、ネイティブ教師とノンネイティブ教師の連携・協働が重要で、役割分担が必要であることを見たが、赴任先国・機関の日本語教育発展のためには、望まれる教師の資質・能力となる。

一方で、「授業連絡をしていない」と回答した4名は、海外の大学で「文化（日本事情）」担当2名、「その他科目」担当1名、国内のその他機関で「総合日本語」担当1名で、同僚教員への授業連絡の必要がないものと思われる。

(4) 日本語教師に望まれる資質・能力

日本語教師の任務は、ただ日本語を教えるだけにとどまらず、日本国内／海外、大学／日本語教育機関、専任／非常勤を問わず、様々に課せられる。担任業務然り、クラス・コーディネイト然りであるが、専任教員の不足していること、業務が多岐にわたっていることが、この現実を物語っている。このことは、日本語教師には、多種多様な知識や能力の求められることを示している。

「国籍や年齢の多様性」「学習目的の多様性」「教師や教育機関の多様性」(⑯)を持った学習者と向き合っていくためには、「これまでの職業経験」「外国語学習経験」「海外での生活経験」(⑰)が貴重な情報を提供してくれる。

(5) 日本語教師の成長

日本語教育について学び始める前には、「アメリカや欧米の学習者が多い」(⑨)や「英語や中国語などの学習者の母語を使って日本語を教える」「国語教育と同じようにやる」「だれでも簡単に教えられる」(⑩)、あるいは学習者や

教育方法について全くイメージのなかった教師も、日本語教育について学習を進め、経験を重ねるにつれて、当初のイメージを変化させていく (12)。

日本語教師としての自覚は、「ネイティブ性」を感じることから始まる。「正しい発音やアクセントで話せる」「文法的に正しい日本語が使える」「日本の社会や文化・歴史についての知識がある」(16) ことが目指される。

また「自身の日本語に気をつかうようになった」「差別や偏見のないものを見方ができるようになった」「国際貢献や国際平和について、考えるようになった」(21) ことは、日本語教師の成長として、大いに評価される。

このように多くの犠牲を払い、苦を惜しむこともなく、「ライフワークとして生涯続けていきたい」(22) と感じるのは、日本語教育・日本語教師に惹きつけられるものがあるからに他ならない。

3 日本語教師のキャリア・パス形成のストーリー — まとめ —

日本国内外で活躍する現職日本語教師が、日本語教師に就こうと思ったきっかけは何であれ、当初から日本語教育や日本語教師について明確なイメージを持っていたわけではない。

自らが日本語教育を受けたこともなければ経験したこともないため、誤認識の生じることがままならない。英語教育や国語教育のイメージが思い浮かんだとしてもさほど不思議ではない。

大学学部で日本語教育を専攻（主専攻・副専攻）する者もいれば、大学卒業後いったんは、他の職に就いたものの、日本語教育への憧憬から日本語教師養成講座に通い、転職した者もいる。さらに大学院進学を果たした者もいる。「日本語教育能力検定試験」に臨む者も稀ではない。安易に職に就けないことは周知のごとくである。

日本語教育についての学びを進めるうちに、当初抱いていたイメージとは認識を異にすることに気づくが、それでも学習を深めるのは、強い憧憬と動機づけがあるからに相違ない。

大学の日本語教員養成課程や日本語教師養成講座修了後、首尾よく職を見つけた修了者（教師）は、日本国内あるいは海外の大学や日本語教育機関で同僚（ネイティブ／ノンネイティブ）との連携・協働を図りながら、教育を実践していくことになる。この連携・協働は、これまでに経験したこのない活動であり、与えられたノルマを遂行したり、役割をこなして行ったりする教育実践こそが、日本語教育能力を強化すると言える。

多様な国籍や年齢、「ニーズを備えた学習者と接することで、日本語教師には、雑多な資質や能力の求められていることに気づく。日本語教育を始める前

の職業経験、社会経験が有益に活かされることを幸せに感じる。

またネイティブ日本語教師であること（「ネイティブ性」）の自覚に目覚めることになるが、「正しい発音やアクセントで話せる」ことや「日本の社会・文化・歴史についての知識」も重要であることを、教育実践を通じて知る。

教育実践を進めるにつれて、日本語教師には、想像以上の苦心が付きまとい、絶えず努力を惜しまない姿勢が求められることを実感していく。日本語教育に関する学びを深めていた当初のイメージを変化させても、至極当然である。

それにもかかわらず、「ライフワークとして、生涯続けていきたい」と希望するのは、日本語教育や日本語教師にそれなりの魅力があるからに他ならない。

このように、日本語教師のキャリア・パスは、教育実践を通じて形成され、教育実践を通じて、教師は成長を続けると考えられる。

注

- 1 <https://www.manpowergroup.jp/client/manpowerclip/hrtraining/careerpath.html>
2023年8月13日閲覧。

参考文献

- 飯野令子 (2017) 『日本語教師の成長 ライフストーリーからみる教育実践の立場の変化』株式会社ココ出版。
- 中川良雄 (2018) 「ネイティブ／ノンネイティブ教員の役割分担と連携・協働の可能性を問う」『グローバル化時代における日本語教育と日本研究』ハノイ大学、pp.252-263。
- (2019 a) 「韓国の日本語学習者が求めるネイティブ／ノンネイティブ教員の資質・能力と役割」『研究論叢』第92号、京都外国語大学、pp.87-97。
- (2019 b) 「タイの日本語学習者が求めるネイティブ／ノンネイティブ教員の資質・能力と連携・協働のあり方」『無差』第26号、京都外国語大学日本語学科、pp.7-20。
- (2019 c) 「ネイティブ／ノンネイティブ教員に求められる資質・能力と連携・協働の可能性——中国と韓国を例として——」『日本語・日本文化研究』第27号、京都外国語大学留学生別科、pp.11-22。
- (2020) 「海外で求められるネイティブ／ノンネイティブ日本語教師の資質・能力と『優れた』日本語授業」『優れた外国語授業創出のためのネイティブ／ノンネイティブ教員の連携・協働』（2017年度～2019年度科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号：17K02906、研究代表者：中川良雄、研究成果報告書)、京都外国語大学、pp.69-89。
- (2021) 「海外で望まれるネイティブ／ノンネイティブ日本語教師の連携・協働と役割分担のあり方」『日本語・日本文化研究』第28号、京都外国語大学留学生別科、pp.1-12。
- (2022) 「中国の日本語教育におけるネイティブ／ノンネイティブ教員の連

携・協働——コロナ禍において連携・協働は可能か——』『日本語・日本文化研究』第29号、京都外国語大学留学生別科、pp.1-25.

—————（印刷中）「日本語教師のキャリア・パス形成と教師の成長」『無差』第31号、京都外国語大学日本語学科.

中川良雄・王尤（2018）「中国人日本語学習者が求める母語話者／非母語話者教師の資質・能力」『日本語文化研究』第五輯（下）、延辺大学出版社、pp.59-66.